災害心理研究所活動報告書

所 長　筒 井 雄 二

〇研究目的

原子力災害による放射線被ばくに対する不安や恐怖が人々の心理的健康と子どもたちの発達に及ぼす影響のメカニズムを明らかにする。これにより，原子力災害が引き起こす心理的影響をより小さくするために有効な心理学的対処方略を開発する。

〇研究メンバー

＜研究代表者（研究所長）＞
筒井雄二（福島大学共生システム理工学類・教授）

＜研究分担者（プロジェクト研究員）＞
内山登紀夫（福島大学人間発達文化学類・教授）
高谷理恵子（福島大学人間発達文化学類・教授）
富永美佐子（福島大学人間発達文化学類・准教授）
高原　円（福島大学共生システム理工学類・准教授）
本多　環（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター・特任教授）

＜連携研究者（プロジェクト客員研究員＞
氏家達夫（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教授）
木下冨雄（京都大学名誉教授，（財）国際高等研究所フェロー）
氏家二郎（国立病院機構福島病院・病院長）
坂田桐子（広島大学大学院　総合科学研究科・教授）
吉田浩子（東北大学大学院　薬学研究科ラジオアイソトープ研究教育センター・講師）
吉野裕之（NPO 法人シャローム）

〇研究活動内容

以下で報告する事項について「災害心理研究所の活動内容」であることに間違いはないが，それぞれの活動を実施するにあたり使用した研究・活動経費は，各研究員がそれぞれ個別に獲得した競争的資金によって行われてきた。それゆえに，ここではそれらの経費を用いて当研究所がどのような具体的活動に関わってきたのかについて紹介する。

１．研究活動

【原子力災害が福島で生活する幼稚園児，小学生と保護者に与えた心理学的影響に関する研究】

本研究は科学研究費補助金基盤研究(B)「放射線被ばくに対する不安が心理的健康と発達に及ぼす影響のメカニズムの解明」に関する調査研究として行われた。福島市で生活している児童，園児と保護者を対象に，質問紙法による調査を行った。そこから小学生や幼稚園児，彼らの保護者が原子力災害のあった福島で生活することにより，どのようなメカニズムで，どの程度の心理的ストレス及び放射能に対する不安を感じているのかについて心理学的に分析した。

【原子力災害が福島で生活する幼児と，乳幼児の保護者に与えた心理学的影響に関する研究】

本研究は，上記と同様，科学研究費補助金基盤研究(B) 「放射線被ばくに対する不安が心理的健康と発達に及ぼす影響のおメカニズムの解明」に関する調査研究として，福島県保健福祉部との共同で行われた。福島県内で生活する 1 歳 6 ヶ月児，3 歳児と，彼らの保護者，及び 4 か月児の保護者を対象に，心理的ストレスと放射能に対する不安を測定した。当該研究では原子力災害が及ぼす心理的悪循環モデルを構築し，そのメカニズムを解明するとともに，支援方法の開発を行っている。

【福島の乳幼児を原発事故の影響から守るための統合的支援システムの開発に関する研究】

本研究は，環境省 平成 26 年度原子力災害影響調査等事業（放射線の健康影響に係る研究調査事業）として，名古屋大学大学院教育発達科学研究科の氏家達夫教授を研究代表者として採択された。4 か月児，1 歳 6 ヶ月児，3 歳児をもつ家庭に訪問し，母親の心理的状態を①多角的に調査・分析すると同時に，②母親の現在の状態と関連すると考えられる様々な心理学

的ファクタに関する指標を用いて調査し，半構造化面接の手法により解析を行った。

２．研究成果の発表

上記に掲げた研究の成果については，平成 26 年 9 月 10 日-12 日に同志社大学（京都）で開催された日本心理学会第 78 回大会において「福島における原子力災害が人々にもたらした心理的問題の現状と今後を考える」と題したシンポジウムを開催し，研究成果の一部を報告した。また，平成 27 年 3 月 20 日-22 日に東京大学（東京）で開催された日本発達心理学会 第 26 回大会でも発表した。さらに，福島の状況を海外にも発信するため，平成 27 年 3 月 5 日-7 日にニューヨーク（米国） タイムズスクエアで開催された American Psychopathological Association の第 105 回年会でも発表した。

そのほか，研究報告の要請をいただいた日本芝草学会，日本発達障害連盟が主催した発達障害医学セミナーでも研究成果の一部を紹介した。

当研究所の活動に関わる新聞報道は，研究所が把握している範囲で 2014 年 4 月 1 日から 2015 年 3 月 31 日まで 14 件。

３．セミナー等の開催

当研究所の研究成果を，原子力災害を経験したウクライナやロシアの研究者と共有し，チェルノブイリ原子力発電所の事故の教訓から見つめ直すと同時に，福島における心理的問題に対する対処についてともに考える国際セミナーを開催した。

第一回のセミナー（写真１）は，2013 年 12 月 9 日，ヤヌコビッチ政権崩壊直前のキエフ（ウクライナ）において，大統領直轄国立戦略研究所にて International scientific-practical seminar "Psychological aspects of overcoming the consequences of large-scale accidents and disasters. The experience of Chornobyl and Fukushima"と題して開催した。

写真１　2013 年 12 月にキエフで開催した第一回セミナーの様子

本年度，2 回目にあたるセミナー（写真２）を，名古屋大学 氏家達夫教授を研究代表者として獲得したサントリー文化財団 人文科学，社会科学に関する学際研究への助成により，2015 年 3 月 25 日-26 日に福島大学において「原子力災害の心理的影響を考える国際セミナー：チェルノブイリ事故の教訓を学ぶ」と題して開催した。同セミナーには，ウクライナ国立科学アカデミー社会学研究所より Gulbarshyn Chepurko 博士，Natalia Sobolieva 博士，ウクライナ DESPRO から Oksana Garnets 博士，ロシア市民防護非常事態研究所から Tatiana Melnitckaia 博士を招聘した。

写真２　2015 年 3 月に福島大学で開催した第二回セミナーの様子

４．ウェブページの開設

研究所の活動や原子力災害が引き起こす心理的影響に関する問題について，市民の皆様によりよく理解いただくために，ウェブページを開設し関連情報を発信している。
URL は http://cpsd.sss.fukushima-u.ac.jp/

５．福島県に対する要望

研究データから推測された将来の福島の子どもたちの発達心理学的問題の発生と，それに対する早急な対処の必要性について，福島県に対して説明し，改善・対応の要望書を提出した。